

## 第4代中央気象台長

## 岡田武松事蹟(Ⅲ)

## 附略年譜

## 堀内剛二\*

## 6. 海洋気象台長岡田武松

## 6.1. 海洋気象台の構想

既述の通り、海洋気象台創設は主として武松の構想になった。そしてその業務の多面的なること、中央気象台に比して劣らず、視野の広さを見ることが出来る。

欧州大戦の後半期、大正6年秋、風水害が甚だしかった。「9月30日、関東地方大暴風雨、死者472、床上浸水10万戸」「10月4日、全国暴風雨被害、死者770、行方不明374、全半壊流失家屋43,870戸、船舶被害2,169隻と報道」<sup>(1)</sup>関口博士によれば、<sup>(2)</sup>この時、

「暴風警報の確度の向上や早期発表の必要が叫ばれて、それに対する施設の改善が緊急問題として取り上げられるようになった。こうした気運に面して、気象事業改革の第一線に躍り出して、計画立案推進の衝にあたられたのは岡田先生で、これが今日の発展に向ふコーナー・ストーンをなしたのである。(略)こうした運動は予てからの問題であった海洋気象と高層気象の観測施設を充実する努力に集中され、神戸の海洋気象台と館野の高層気象台の設立計画が、その緒についたのもこの時であった。」

堀口博士によれば、<sup>(3)</sup>

「これは最初、中央気象台の拡張計画として予算が提出されたもので、私が初めてこの計画を耳にしたのは、大正7年の夏の初めだったと思う。立案者の岡田先生がその候補地として大阪と神戸を選ばれ、実地視察に来られた時である。(略)大体の輪廓だけでも一地方測候所長あたりが想像もしない雄大なもの(略)当時は中央気象台自身(略)技師が4人に過ぎなかった時代(略)今度の計画は技師が10人だとのことである」また、磁気偏角図については、

「船から中央気象台に集まって来る気象報告を毎日図に入れてみると、船の航路がジグザグになっている。そのわけを究明せられると、当時船が使用している磁気偏角図は、ドイツのものを日本で写真翻刻したもので(略)戦争で、ドイツとの交通がとまり、新しい偏角図が手に入らなかったためである。」<sup>(4)</sup>

時代はこうして気象事業に対し要求する所が多かったに

\* 気象庁研修所

(1) 岡崎、外、日本資本主義発達史年表

(2) 関口、天気予報修業の思出。天文と気象。16巻。10号

(3) 堀口、岡田先生の横顔。天文と気象。16巻。3号

(4) 堀口、同上

も拘らず、文部省はその事業を認め、建築費を認めなかった。岡田武松、また神戸測候所長堀口由己の奔走について、時の兵庫県知事清野長太郎は、次の如く述べた。<sup>(1)</sup>

「(昭和)7年の8月始頃公用を帯びて上京致しました際」「堀口技師が自動車の中其他の所にて海洋気象台設立の必要なことを私に話され」「其後8月10日汽車の中で、それも丁度沼津から大津までの間、海洋気象台一点張りで、種々説明を承りました」「米の値段が日々暴騰しますので、これは何とかせねば神戸でも意外な事件が起りはせぬかと心配しました」「11日に湊川の方で不穏な変があり、12日には遂に米騒動、其の晩には所謂神戸の焼打事件がありました。」「当時12日の騒動の際に」「到底警察力では難しいから、姫路の師団へ軍隊の出動を懇請しました」「神戸市民は胸々として居る際に係はらず、堀口君は一向無頓着で逢ひさへすれば海洋気象台のことを云はれるので、顔を見るとゾッとしました。」「米騒動の後に意見書を内務大臣に差出し、9月の4日上京しました所、性来の弱い体が東京へ着くと直ぐ病気になるしました。ところが岡田台長が6日に態々結構なお菓子を以てお見舞に来て下さいました。それもお見舞よりは海洋気象台建設の事が主なものと思はれました」

この8月富山県下に起った暴動は忽ち関西各都市に波及したのであった。

創設時の海洋気象台は地下一階地上2階、中央屋上に測風塔を備えた、純白化粧煉瓦に赤屋根の瀟洒な洋館で、玄関左脇壁面にその設立趣旨を刻した銅板を掲げた。<sup>(2)</sup>

## 海洋気象台設立趣旨書

文部省夙ニ海洋気象台新設ノ意アリシモ機未タ熟セスシテ空シク経過セシカ偶世界大戦ニ会スルヤ我国ノ海運ハ未曾有ノ發展ヲ遂ケ海洋気象台ノ必要ハ益切実ニ感セラルルニ至レリ大正七年春時ノ兵庫県知事清野長太郎氏ハ岡田文部大臣ノ意ヲ承ケ神戸海運業者諸氏ト会同シ之カ建設費ノ出捐ヲ諮リタルニ諸氏亦大ニ此挙ヲ賛シ庁舎附属品全部ヲ新設シテ之ヲ政府ニ寄附センコトヲ諾ス乃出捐者中ヨリ川村貞次郎、河内研太郎、勝田銀次郎、新庄清一、四井喜一郎ノ五氏ヲ撰ビテ建設委員トシタルカ後島村幡彦氏新庄氏ニ代リテ委

(1) 海と空。第4巻、第5号 (2) この銅板は昭和20年3月17日戦災にかかり、後松平康男博士が灰燼中より取得

員トナリ市内宇治野山ニ地ヲ相シ八年四月エヲ起シ九年四月ヲ以テ功全ク竣ル。之レヨリ先内閣ノ更迭アリ中橋文部大臣新ニ就任セラレシカ建設中ノ氣象台ニ無線電信設備ニ欠知セルヲ遺憾トシ時ノ兵庫県知事有吉忠一氏ヲシテ更ニ神戸大阪ノ有志諸氏ト議セシメ左記諸氏ノ出捐ニヨリ兵庫県庁内ニ建設委員ヲ設ケ十一年十一月知事折原喜一郎氏ニ至リ之カ設備ヲ完成スルコトヲ得タリ此ニ於テカ海洋氣象台ハ首尾共ニ整ヒ神戸港頭巍然トシテ一儼觀ヲ加フルニ至レリ依ツテ茲ニ其事由ト出捐者ノ芳名ヲ録シテ永ク本台ノ記念トス

大正十一年十一月 (下略)』

海洋氣象台及附属庁舎官舎は、大正8年4月15日起工、大正9年5月6日竣工、大正9年9月30日文部省に引継、建築設計者工学士渡辺節、建築請負者竹中組本店、海洋氣象台建設費計246,729.54円(裡17,500円無線電信建設委員に引継、1,500円地球磁力観測所建設費トシテ岡田台長ニ引継)。無線電信所及附属庁舎は、大正10年9月24日起工、大正11年8月25日竣工、大正11年12月13日文部省に引継、無線電信所附属官舎は、大正12年2月19日起工、大正12年9月5日竣工、大正13年2月27日文部省に引継、海洋氣象台附属無線電信所建設費計165,150.65円であった。(1)

海洋氣象台創業の大正9年8月、佐藤順一、坂山大三は氣象技師となり、佐藤は現職のまま北樺太に、坂山は、長谷川書記、吉川、川上、岡及石井技手などと共に、海洋氣象台勤務となった。同年6月氣象界に入った佃十吉が、また、東北大学を出た須田皖次が同台勤務となった。

「大正10年1月文部省令第1号を以て海洋氣象台器械検定及調整規程を定め」(2)「海洋氣象台に氣象器械及時辰儀、時計、羅針盤其の他の航海測器の検定又は調整を依頼する者は此の規程に依る」(3)

同月リーフラーを發注、翌2月26日関口鯉吉は時辰儀研究のためスイス及英国へ1カ年の留学。リーフラー標準時計は5月中旬、同バンベルとの経緯儀は同下旬に到着、直ちに据付を終った。

5月21日、海洋氣象台に各測候所、観測所の所長其他73名が参集し、無線電信に依る氣象実況報の通知方式等について協議した。「即ち今度海洋氣象台から海上の船舶に無線電信で氣象実況報を送ることになるについては其方式を定めたいと云ふのでありますが(略)これを傍受したいと云ふ測候所側の希望があるので、それなら通知方式も船舶に便利であり測候所にも亦便利である様な者はどう云ふのであろうかと云ふことが相談された」(4)

6月3日勅令第258号によって氣象台官制中技手定員55人を58人と改めた。この3名は海洋氣象台にて無線電信の事務に従事する為であった。やがて、神戸測候所が

海洋氣象台庁舎に引移ったその旧測候所跡に無線局の基礎工事が始まり、明けて大正11年8月25日竣工、発信試験の後12月4日より実況、警報氣象報を開始した。呼出符号JTJ、使用電波警報は600米可聴発射、其他は昼間600米夜間750米、発信時刻警報は随時、実況は午前9時30分、午後3時30分、同9時30分、の3回であった。この発信設備は氣象専用として世界最初、これも既述海上氣象電報以来武松の脳裏にあったものと推測される。

海洋観測のため、モーターランチ海洋丸が大正10年3月29日琵琶湖で進水、長さ30尺速力7ノット、キャビンには数人が乗れた。同12月24日抜山、須田などは海水温度及ウネリの観測に州本へ出張した。大正13年夏、須田が大坂湾の海洋観測を試み(1)、翌大正14年琵琶湖の観測をした(2)。だが、海洋丸はもともと神戸港内で使用する程度で、後、昭和2年、春風丸が建造される。

刊行物は、先づ大正10年4月、海洋氣象観測法が刊行された。なお同月に、週間天気図、磁力偏角図が発刊され、翌5月「海と空」第1巻1号ののりが出るのが見られる。

これよりさき、臨時神戸出張所設置で関口鯉吉が神戸に移るや、神戸測候所堀口由己、平野烈介、高山四郎、田口克敏等と神戸読書会報を發刊、第1号は大正9年5月で第4号(同8月)を以て廃刊、武松の海洋台長となるに及んで、10年4月再び「時習会」が組織されて5月機関誌「海と空」の創刊となった。時習会は、また、雲紋図、天気図用紙、測風気球観測用紙をも販売した。後これが海洋学会となることは周知である。

海洋氣象台欧文報告は大正11年6月、北太平洋天気図は翌大正12年8月發刊で、船舶関係者に無料配布した。

赤道儀式10吋望遠鏡の据付を終え諸設備完整した海洋氣象台は、大正13年4月15日、11時新館三階広間にて竣工式を挙行した。16日は市内の官民数百名を招待、17日は一般参観日とし、参観者二千数百名を数えた。

## 6.2. 中央氣象台元衛町移転

大正8年7月国富信一中央氣象台奉職時、

「高等官は5人、台長の中村精男先生、大石先生(第2課長、統計)、岡田先生(第1課長、予報)、長谷川さん(第3課長、観測)、吉田徳一さん(第4課長、検定)で、私共が入ってから技師2名が増員、築地先生と小野澄之助先生。私の次の年に佃君が同級だが、海洋氣象台に入った。」(3)

既述の臨時大阪出張所神戸移転に際し、神戸出張所長は関口鯉吉となり、藤原は本台第2課に戻った。当時、大石、岡田は既に不在勝であった。この氣象台の混沌期、

「その時に総務部が出来て、総務部長が小野さん、藤原さんと築地さんが主任でわれわれ(国富)も名前をもらった。その合議制でいろんなことをきめた。その上に中村台長が居られたが、台長は何も関係がな

(1) 海と空、第4巻、5号 (2) 中央氣象台一覽 (3) 同規程第一条 (4) 海と空、1巻、2号

(1) 海洋氣象台彙報6号 (2) 同8号 (3) 国富：岡田武松先生を偲んで、天気、4巻1号

い。岡田先生が東京に来た時九段近くのお宅に伺った。その折「どうも近頃は学者が書類を持って歩きたがって困る、やたらに印ばかりつきたがる。部だの、課だのを置くからいけない、これは係の主任で沢山だ」と云われた<sup>(1)</sup>

これによって、中央气象台分課規程及事務分掌規定(大正9年8月26日)がなつたと云う。

「その主なる点は従來の課を廢止して測候(氣象佐木, 地震中村), 予報(築地, 藤原, 佐木), 電気通信(小松), 雷雨(藤原), 統計(渡辺), 校閲(田代), 津浪(中村), 地震(中村), 磁氣(国富), 外国氣象(築地), 器機(草間), 検定(氣象小野, 地震中村), 庶務(奥山), 會計(坪内), 図書(中野)及総務(小野)の諸掛を置く事となり, 氣象事業一般の進歩改善に関する事及中央气象台の重要事務に関する事は総務掛これに参与するものにして小野技師を主任とし技師全部及奥山坪内両書記国富中野両技師これに属す<sup>(2)</sup>

藤原博士によれば,

「中村台長は温厚な長者であつただけ、覇氣はなく絶対保守で、上司からの要求なくして自分等の事業の擴張を計るのは不謹慎であるという道德観を持たれた方だったから、その下で事業を進めることの困難は想像に余りがあった。中村台長は岡田先生が新計画を進言してもなかなか受け入れられないが、むげにいけないともよう云はれない<sup>(3)</sup>

だが、当時新計画は続々実現を見つあつて、中村精男は既に第一線を退いていた感がある。なお、後述する通り、大正11年中村台長渡歐に際し、武松は台長代理となるが、直ちにこの総務掛を廢止した。

「中央气象台に於ては近來台務の外調査研究を為すべき事項益増加し技師の職愈々重きを加へたれば岡田中央气象台長代理は3月31日附を以て当分の間総務掛を廢し、今迄総務にて処理せし事項は以後全部台長に於て処理せらるべき旨告示せられたり<sup>(4)</sup>

武松の官僚的繁文褥礼に対する考えを如実に示すものと云えよう。

中央气象台は大正9年9月29日、海洋气象台創業の約1ヵ月後、測候掛及地震掛を除いて麴町区元衛町1番地に移転した。

「新館は木造二階建にして30余室より成る。南面玄関より入りて右側に新聞記者室左側に受付あり正面には応接室二室中庭に面して設けらる。左側階下は受付に続きて庶務及會計室ありこれに隣りて建物の南西隅に当り第1食堂ありこれより西側に治い経師室宿直室及第2食堂の設ありて北側に移れば此処は殆ど全部検

定掛の使用する所にしてその東端に實驗室2室新に設けられたり。實驗室の後には別棟にて蓄電池室建築中なり。将来における氣象事業發展の氣運はこの二室に期待せらるる処多かるべし。これより東側に廻れば陳列室ありて南側に出づ、此処は目下図書室に充てらる。その内の一室は氣象学会の事務所借用せる所なり。この前を通れば再び玄関に出づ、玄関の左側受付の後に表階段あり。階上に登れば右は會議室にして正面玄関の上に当り数百人を容るるに足るべし。これより左に廻りて台長室貴賓室台長応接室あり。階上北側に至れば練習生室雷雨掛室校閲統計掛室地震津浪掛室あり又東側には地磁氣掛室総務掛室あり。南右側は総て予報掛及これに關係せる室なり。以上は大体館内の模様なるがこの外附属の建築物には小使室工場及官舎五棟等あり(略)移転に先ちて台長以下一同旧館庭上の樹下に集り30余年住み慣れし本丸の地に留別の茶話会を催せり<sup>(1)</sup>

この新館は間もなく大震災に会う。旧本丸移転の理由は詳かでないが、恐らくは敷地狭少となった為であろう。

高層气象台もほぼ同時に、庁舎、工場、機関室、氣球室、風揚室、官舎の工事竣工し、従來中央气象台内に臨時に設置された高層气象台事務所は撤収された。かくして、翌大正10年5月の全国氣象協議会は海洋气象台、中央气象台、高層气象台と会場を移して開催した。

### 6.3. 岡田武松渡歐

武松の官舎は、宇治野山南側官舎の西端であつた。海洋气象台創業当時は、単身赴任の武松の身辺を、妻みつの母とし、同じく妹豊子が見た。大正10年春、妻みつは御茶の水女学校卒業の易を伴い、神戸に転居した。

この頃、气象台関係で渡歐するもの漸く多きを数えた。既述の関口鯉吉について、大正9年5月30日学士院賞授与の藤原咲平は同年末急抛留学を命ぜられた。

「文部省から、その年度の外国旅費に余剰が出来そうだから、气象台から一人洋行させたらどうかとの勧告があり、一方ノルウェーのピヤルクネス教授から、同教授の研究室で新しい天気予報術が發明されたから学生を送らねえ、との案内状がとどいた為<sup>(2)</sup>

藤原は12月25日頃中村台長から、28日横浜出帆の熱田丸に乗る命をうけ、30日門司で石炭積込中の熱田丸を陸路追いかけて乗船した。

咲平はベルゲンで極前線論を学び、渦巻の研究を始めた。10年8月ロンドンに戻り、ショーの下で論文を推ぬし、王立氣象学会誌に発表した。<sup>(3)</sup>

武松は、大正9年11月25日、學術研究会議会員を仰付られ、続いて、翌10年4月30日、欧州出張被命。國際氣

(1) 国富：同上 (2) 氣象集誌、大正9年、300頁

(3) 藤原、岡田先生の横顔。天文と氣象。16巻、4号

(4) 氣象集誌、大正11年

(1) 氣象集誌、大正9年10号299頁、10号口絵写真参照

(2) 藤原、天文と氣象。16巻 (3) S. Fujiwhara : Quart. J. Roy. Met. Soc., 47, 287. 1927.

象学委員会委員としロンドンにて開催の国際気象会議出席のため、地震学の中村左衛門太郎と共に、7月渡欧した。また、この10月、築地宜雄は藤原の後をベルゲンに留学した。関口博士によれば、

「当時の記憶で愉快だったのは、気象関係の師弟知友が5人も英国に集って、日々雑談し異郷のわびしさを慰めあう(略)ていたことである。岡田先生と2人(関口、藤原)のほか、航研から小林辰雄君が来られて(略)後からは気象台の築地さんが新時代の予報業務視察の意味でベルゲンに向われる途中来英されたのである」<sup>(1)</sup>

この時武松は、新知識を吸収しつつあった関口、藤原に「尻馬に乗るな」と訓戒した。

岡田、関口は大正10年暮、藤原は11年3月、築地は11年8月、それぞれ帰朝した。海洋気象台の予報は、

「その時分は堀口君のほか八鶴、佃の両君が天気図業務に仲間入りをされて、一週間交代で仕事の担当をしたものであるが、岡田先生の訓戒を守って、伝統的の天気図型式を堅持し、当時東京の予報主任を承わった築地さんがベルゲンから輸入された、極端なノルウェー流と好固のコントラストをなしていた」<sup>(2)</sup>

藤原は帰朝後直ちに渦動論を発展し岡田の法則に及んだ大正11年1月21日中央気象台長中村精男は、学術研究会議出席のため、平山信、今村明恒両博士と共に、ローマに向い榛名丸にて神戸出帆。同2月25日海洋気象台長岡田武松はその間中央台長代理を命ぜられた。中村は9月8日神戸着の郵船鹿島丸で帰朝した。

明けて大正12年2月28日、中村精男は30年に及ぶ長期に亘って占めたその台長職を退いた。明治12年和田雄治と共に地理局に入ってより実に45年であった。

同日を以て、武松は中央気象台長事務取扱を命ぜられ、2級俸を賜った。更に続いて、3月12日航空評議員被仰付、3月21日鉄道事務嘱託、5月28日震災予防調査会委員被仰付、かくて、7月14日補中央気象台長兼海洋気象台長となり、名実ともに日本の気象事業を統轄することとなった。その10日後の7月25日夜神戸着の江田島海軍兵学校練習船二河川丸で来神した高松宮は翌26日午後海洋気象台を見学した。

「台長岡田博士以下庁員の奉迎裡に正面玄関から休憩室に入らせられ先づ天気予報室から測候所事務室気象台の事務室、地下室の大時計と順次御覧覽地震計のある狭い室にお入りになると微細な機械を覗き込まれてその構造を仔細に御研究あり、無線電信室では海洋航行中の船舶に気象通報の状況などを御覧になり三層楼の露台にある風速計の前に立たせられる。係員は其処で直径1尺5寸大の真赤なゴム風船を飛ばす、岡田博士が(略)御説明申上げると殿下は眼鏡の中を覗かせられ「成程風船が走る」と仰せになって御興が深い

(略)中央に聳えた予報信号柱には南西の風を示す三角の赤と青の旗、晴驟雨模様を示す白と青の旗がヒラヒラとハタめいている」<sup>(1)</sup>

この大正12年は、かくして、武松の生涯にとって重要な年となるが、周知の9月1日にはまだ1カ月余が経過せねばならない。

しかし乍ら、武松の中央台長事務取扱被命2週間後の大正12年3月13日、一人娘易は抜山大三と婚姻、同日入籍した。仲人は堀口由己であった。そして、抜山大三は同7月10日付で東京帝国大学へ転じた。

易は当年20才、その後1男3女の母となった。

武松は兼てより易を嫁がせる所存であった。自らは嗣子なくてその生涯を終る積りであった。この決意は後遂にくずれる。

## 7. 中央気象台長岡田武松

### 7.1. 附属測候技術官養成所

武松が広い意味で優れた教育者であったことは、既に指摘されている。明治33年、気象観測練習会規則になって、数次に亘って練習会が持たれ、明治41年所用経費の予算計上を見たことは既に述べた。

「明治の末葉から大正の中頃までは所謂法科万能の時代であり、技術官などは木の切端の様のものであった。測候所などは国営ではなく地方庁に属して、農務課長の下に隷属していた。測候所長はその属官の下にビクビクしていたものである。測候所では職員は技手までで技師にはなれなかった。気象台でも技師の定員が4人だから老生は六年間、藤原博士は九年間も技手でいた。地方の県庁へ行度にヒドク冷遇されて、いつも不愉快な目に遇ったものだ。その都度自分のことは忘れて、地方の測候所の職員を何とかして技師まで昇格する様にしたいもんだと念じた」

大正9年8月11日勅令248号を以て地方待遇職員令が公布され、ついで、同12月27日勅令570号にて地方測候所職員制が制定を見、その待遇は同日勅令571号にて上記職員令によることとなり、従来の測候所技師、技手、書記がそれぞれ測候技師、技手、書記となり、例えば、技師は従来5等官止りであったのが3等官まで累進し得ることとなった。そして、

「高等農林学校を出た人々は技師まで昇れるが、測候所には之に相当する高等専門学校がないので、依然として技師になる途はない。之では大変だと云うので気象の高等専門学校である技術官養成所を中央気象台附属として設立することになった。」<sup>(2)</sup>

このようにして測候技術官養成所設立が決定する。中央気象台附属気象技術官養成所一覧の沿革大要によれば「気象台技師理学博士藤原映平専ら斯機関の設立を

(1) 神戸新聞記事。海と空。3巻8号所載 (2) 岡田。創立当時の気象技術官養成所、研修時報。No. 2 創立30周年記念特集

(1) 関口。天文と気象。16巻、10号 (2) 関口。同上

建言され大正11年8月3日文部省告示第511号を以て中央気象台附属測候技術官養成所規則を制定す9月25日勅令第412号を以て中央気象台官制改正附属測候技術官養成所設立せらるる9月第1回生徒を募集し入学志願者150人中15人を採用す、10月9日気象台技師理学博士藤原咲平主事に補せらるる10月10日麴町区竹平町1番地中央気象台庁舎内に於て授業開始す此日を以て創立記念日と定む、大正12年9月1日関東地方大震災の爲中央気象台庁舎全焼せるに付授業を北桔橋内旧中央気象台庁舎にて授業す」

ここに「藤原咲平専ら斯機関の設立を建言」とあるのは、当時武松が海洋気象台長の職にあった故で、その主唱であることは推定に難くない。

「初めは教室も仮りの設備だし、寄宿寮も全く不完全極まるものであった。只学科丈は大したものであった。高等数学は勿論一般物理学、理論物理学、気象学、地震学、天文学、海洋学、地理学等を含んでいた。程度は普通の高専よりは高く、丁度旧制大学の前期の程度であった。」<sup>(1)</sup>

第1回生石丸雄吉は次のように追憶した。

「学校よりも塾といった感が深かった。竹平町の四角な二階建の中庭のある中央気象台の二階の西北の隅の一室が教室であり、中村精男先生を始め岡田、藤原、築地、小野、佐木、中村、国富、中野諸先生等当時の中央気象台の技師が代る代るに教えられた」<sup>(2)</sup>  
震災後は、旧本丸元庁舎に教室も宿舍も仮住した。

「旧本丸の雨もりする旧館の離れの大部室に寝泊りしたのが寮の始めだと思う。この建物の東の室に藤原先生の家族、次の室が食堂で入口に面した北側の室が二年の教室、その南の中の間が一年の教室、そして南側に面した細長い室が幕で仕切った寮というわけ」<sup>(3)</sup>

「大正13年10月18日文部省令第24号を以て測候技術官養成所規程制定され高等専門学校とせられ(略)大正14年1月中央気象台構内に仮校舎竣工す」<sup>(4)</sup>

武松は、結局、その孤独な晩年を通じて、生涯の最も長い期間を著述と教育に係わった。ここに「測候瑣談」より教育に関するものの若干を拾えば、

「測候所や気象台などは大体が建物よりは設備であり、設備より職員である」

「測候事業ほど共同的なものはない、いくら一人がエライ人であっても他のものが共同しなければ決して此の事業は出来ない」

「筆者30年の経験で見ると、この事業に従事する人はおとなしいものは駄目のやうである」

「測候技術官養成所の教育方針は単に測候に従事する職員を養成するに適当な教育をすと云ふまでで成文になったものはない。一定の学科と実習以外は人格

の修養を特に留意する位に過ぎない。然し自ら一貫した方針はある。即ち、気象現象に親しむ、といふことである。是がなければ何程測器を読み取るも自記器械には及ばない。何程数理を運転しても数理そのものであって気象ではない」

後述するが、昭和8年春、品川に寮が新築され、武松はこれを「智明寮」と名づけた。老子道德經に「知人者知己者明」とあるによつたと云う。実に、武松自身を語るものと云う外はない。

## 7.2. 関東大震災

中央気象台新館成り(大正9年9月)、大正12年1月1日より測候掛もその元衛町へ移り、中村精男の退官に続く武松中央台長就任後1ヵ月余の同年9月1日11時58分、周知の関東大地震が起つた。

「9月1日関東地方大震災の爲め風力塔、図書館、空中電気室、門衛所、官舎一棟の外は庁舎官舎諸設備灰燼に帰す然れども観測事務は之を継続し全国天気予報暴風警報通報に関する事務の執行を一時海洋気象台に委託す9月12日応急無線電信受信設備により海洋気象台の無線気象電報を受信す同月21日より仮製天気図を発行す」<sup>(1)</sup>

木造二階建新館は、壁に亀裂を生じ所々脱落、屋根瓦4分1落ちたる程度。官舎脆弱にして、1号2号顛落、5号(台長官舎)また柱折れ傾斜した。書棚は概ね倒れ、標準寒暖計等挫折、クロノメーター床上に投げ出され、カセットメーター転倒、スプリングの水銀晴雨計は時計の下げ振りの細きスプリング切断。時計は皆止った。蓄電池室の電池の転倒のため硫酸流出し白煙を上げた。<sup>(2)</sup>  
田代技手は転倒する書棚で手首を挫折した。武松は当時書記室にあって、坪内書庫と共に金庫の前に避難した。その金庫顛倒し危く逃れた。

午後2時頃通勤者の帰宅を許した<sup>(3)</sup>。4時頃武松は飛火に対する準備のためホースを出し、図書館の窓をしめるよう命じた。6時頃麴町5番町方面から本館屋根に飛火したが、消し止めた。武松は本館正面で指揮を取り、藤原は屋根に上った。10時頃如水会館の後から黒煙が昇り火の粉が繁く、風は北々西の烈風であった。周囲の広場は神田方面からの避難者で埋まった。

11時仏蘭西大使館に火の手の昇った時、藤原は屋根を下り、難民を宮内省主馬寮内に指導した。藤原がとって返した時文部省は半ば焼け、これで気象台は残ったと思われた時、屋根に火がついた。3ヵ所までは消した。2、3分の裡に軒に火が広がりに、本館の火はやがて官舎に移り、総てが烏有に帰した。

武松宅にては、前日の8月31日抜山夫人易が長女みち子を出産した。心痛の爲一旦帰宅した武松を、夫人みつ

(1) 岡田。研修時報。No. 2 同上 (2) 石丸。同上

(3) 石丸。同上 (4) 測候技術官養成所一覽沿革

(1) 中央気象台一覽 (2) この節、震災と中央気象台。気象集誌。2輯1巻9号 (3) この節、藤原、群濁。地震と火災

は台務をとるべく励ました。本台書類中焼失をまぬがれたものは武松の指揮に負うものが多かった。当時観測当番の三浦技手は激震中風力塔上に攀ち終夜観測を続行した。三浦の長男栄一は当時日比谷小学生で火災後も弟二郎と共に炎天に立って表門を衝った。

当時東北大学病気休学中の群司は2日夕刻布佐町より自転車にて駆け付けた。神戸よりは関口外数名が来援。人々改めて海洋気象台創設の卓見に服した。4日夕武松兄金太郎は群司と共に人夫3人にて食料を搬送した。中村清二、長岡半太郎、寺田寅彦、田丸卓郎、中村精男、大石和三郎などの名が来訪者名簿に見られた。

この大震災火災により、中央気象台以外に、横浜測候所、銚子測候所館山出張所、布良測候所が罹災した。横浜測候所長朝倉慶吉は不慮の死を遂げた。海洋気象台高層気象台の主唱で全国測候従事員より2,491.84円の拠金を得てこれを罹災各所員に分贈した。

この台長就任直後の関東大震災火災は、日本の気象事業全般を殆ど再編せんばかりの烈々たる意欲を武松の胸中に燃えさせた。

「震災復旧設備として中央気象台に於ては着々設備及図書等を補填しつつあり、注目すべきものとしては無線電信発受設備(塔高200尺、3キロワット真空管式)石版印刷輪転機、工場精密器機、地震計等」<sup>(1)</sup>そして、武松が当時とった処置には稍応急手段に近いものもなくはなかった。例えば、上記無線施設については、「先生は機を逸せず、中央気象台に気象通信専用の無線通信施設の緊要欠くべからずとし直ちに庁舎の復旧と共に計画を立て所要経費を要求し幸いに容認された。その工事は大正13年12月完成し、14年2月10日通信を開始した。」所が「中央気象台の無線塔工事に当り通信省では施設の許可を請けないで設備するの不法を責め工事の中止方勧告を受けた」<sup>(2)</sup>のであった。また、柿岡地磁気観測所改築については、

「関東大地震の一週間位後に、私は先生(岡田)に「柿岡はつぶれたらしいから調べて来い」と云われた。(略)それは大変だと云うので私は柿岡に行ったが、あそこは震度4位でつぶれるどころではなく、大したこともない。(略)それから奥山さんに相談したら改築の予算を出さねばならぬという。そうですかと云うので全部残らずつぶれたことにして報告を作った。これがたぬき親爺と云われたゆえんである」<sup>(3)</sup>

武松がたぬき親爺と呼ばれた所以は、日本気象事業の責任者としての断固たる自信と、他者の想像を許さないその深謀遠慮にあった。柴田雄次博士によれば

「(前略)その折誰かが岡田先生は予算獲得の妙手であったといただいた。この席には文部省関係の人も

いていうには、予算獲得には技術はなく、必要という確固たる信念による熱意とこれを要求する人の人格の高さによるもので、岡田先生のはそれでしたとの言に吾人も首肯したことである。」<sup>(1)</sup>

柿岡の施設は倒壊はしなかったが、しかし、それは改築されねばならなかった。当時柿岡には番人程度の駐在員が一人居たので、観測者は東京より出張し、記録紙は全部本台に持帰っていた。従って、この火災の為、柿岡開設以来の野帳、記録紙の大部分を焼失した。これによって武松は、柿岡の施設を拡張した現地で常駐観測し得る体制を取るべく即座に決意したに相違ない。大正14年末には庁舎、絶対観測室、磁力自記室、空中電気室、官舎を完成。また赤道儀室も設置、後昭和3年には、シュミット式磁気経緯儀、磁気感応儀、磁気探針用偏差計等を購入して測定精度を増す処置をとった。<sup>(2)</sup>

なお、この大震災を機に、勅令第312号により、従来の震災予防調査会官制(濃尾地震にて制定)を廃止し、震災予防評議員会と地震研究所(14年11月)が設置され、気象官署の地震観測網が一挙に整備された。

全国20箇所の測候所を選び、地震検測設備と観測者を置いた。地点は、測候所13箇所で、根室、札幌、秋田、仙台、銚子、沼津、長野、浜田、長崎、宮崎、高知、州本、名古屋。附属測候所7箇所で、柿岡、富江、八丈島、父島、潮岬、名瀬、石垣島、であった。検震設備は、ウイヘルト地震計一組、強震計一組、簡単微動計一組で、検震時計にはルロア電気時計を用いた。時刻用としてナルダン経緯儀、クロノグラフは国産品、他に引伸器械、小型施盤、以上で一個の設備費9,000円、観測員の俸給補助年額1,000円であった。<sup>(3)</sup>

大正14年11月14日、武松は震災予防評議員を仰付けられ、大正15年1月20日、東京帝国大学教授兼任、また同日寺田寅彦とともに地震研究所員に補された。

中央気象台仮庁舎竣工(大正13年3月)同無線装置完成(12月)養成所校舎竣工(14年1月)に加えて、14年8月に柿岡地磁気観測所、同12月に中央気象台製作工場がそれぞれ成った。大正12年3月事務分掌に航空気象を加え、14年7月更に農業気象、気象器機の製作修理を加えた。また、既に大正10年11月布良、長津呂、皆月、足摺の4臨時出張所を持ったが、12年6月鳥羽検測所を新設、13年12月陸地測量部より花咲、岩崎、鮎川、串本、外ノ浦、深堀、基隆の7検測所を引継いだ。更に14年10月、沖繩測候所がその事務を開始し、昭和2年4月その庁舎及無線装置を完成、と気象事業は着々整備されていった。

[未完]

☆ ☆ ☆

(1) 集誌、2輯2巻5号。大正13年 (2) 奥山、岡田先生を偲んで。天気、4巻1号 (3) 国富、岡田先生を偲んで。同上

(1) 科学、26巻10号、1956。 (2) 今道、岡田先生の横顔16巻3号 (3) 岡田、測候瑣談、294頁